

論文 (Article)

小学校教員養成課程のピアノ指導を考える

——現職小学校教員の授業実践の現状に着目して——

**A Study of Piano Teaching for Students
in Teacher Training Courses of Elementary Education
: An Analysis of Interviews with Elementary School
Teachers about the Current State of the Teaching
Practices**

山本 祐子
Yuko Yamamoto*

小杉 裕子
Hiroko Kosugi**

I. はじめに

教員養成機関でのピアノ教育については多くの大学で高く関心がよせられている。教員養成大学本来の目的に沿った視点で、中島¹⁾は学校現場における実践的指導力の育成を目指したグループレッスンによる授業実践を報告している。連弾曲をもちいたグループレッスンにおいて、個々の感性と共に音楽の理論や知識を繋ぎ合せることで音楽的教養を高めることを試みている。

また、教則本も多数出版されている²⁾。基礎練習を始め、伴奏のためのコード理解からその応用、弾き歌いが多く取り上げられ、その必需性をうかがえる。

さて、小学校音楽科の授業を担当するのは、学級担任や専科教員である。学級規模に応じて専科加配があるものの³⁾、実際の担当教科については学校に任されているため必ずしも音楽を専攻したものが音楽科の授業を担当するというわけではない。音楽専科補充として小学校現場に関っている筆者(山本)は、学級担任(特に非音楽専攻)から音楽科授業について悩みの声をしばしば耳にする。その多くは授業実践に関することと同時に演奏技能の不足についてである。一方、音楽を専門とする音楽専科の教員においては、演奏技能についての不安はないからこそ、ピアノの前から離れず子どもの様子すら気かけないで独演している教師もいる、というような、授業でのピアノ使用の在り方を危惧する話を耳にする。その中で、今年度の新学指導要領の完全実施(小学校)にもみられるように学校教育は新しい流れで出発しようとしている。

団塊世代の退職に伴い、近年、教員採用数が急激に増しており、この先5年間を見ても採用見込み数はやや増加のもようである。そのなかで新規学卒採用者の採用率も年々上昇傾向にある⁴⁾。新任教員にとってはこの若年化の進む現場でベテラン教員からの手厚い支援や指導を待ち望んでばかりはいられない現状でもある。つまり、一教員として現場に出て即働く実践的指導力が求められるのである。そのような状況の中で、教員養成校においては、学生がどのような力をつけていけばいいのか、すなわちどのような力が学校現場に出た時に教育者として生きて働く力となるのか、というこ

* 椋山女学園大学教育学部非常勤講師「基礎ピアノ」

** 椋山女学園大学教育学部

とを改めて考える必要がある。

そこで、本研究では、初等教育専修において身につけたい演奏技能、とりわけピアノ演奏技能について、現職小学校教員の授業実践をインタビューを通して分析検証し、小学校教員養成課程の学生に対するピアノ指導のあり方について考えることを目的とする。

Ⅱ. 方法

(1) 調査の対象者

対象者は次の小学校教員4名である。

教師A	:	音楽専科	〔若手〕	教職経験	2年目	女性	N市
教師B	:	音楽専科	〔中堅〕	教職経験	16年目	女性	Ta市
教師C	:	学級担任	〔若手〕	教職経験	3年目	男性	K市
教師D	:	学級担任	〔中堅〕	教職経験	22年目	女性	To市

上記4名に設定した理由は、次の二点からである。

- ・ 小学校では音楽の授業を担当するのは学級担任や音楽専科教員のどちらもあり得るため、その両者から聞き取りを行うこととした。また、音楽の授業を担当する学級担任は、大学での専攻を音楽としない割合が多いため、非音楽専攻の学級担任を選定した。
- ・ 教職経験年数によって授業構成や授業でのピアノやオルガンなどの鍵盤楽器（以下「ピアノ」と略記）演奏の実態に相違点がうまれることが予想されるため、「中堅」⁵⁾（教職経験10年を過ぎた教員）と「若手」⁶⁾（教職経験2、3年の教員）を対象とした。

(2) 調査の手続き

調査のために、2010年8～9月の期間に一名1時間から2時間程度でインタビューを行った。実施場所については、教師Bの勤務校、また教師Cについては筆者が同僚であるため同勤務校にて、そして教師Aと教師Dについては校外である。

初めに研究の目的を説明し、インタビュー内容をまとめた紙面にしたがっておよその流れを説明した。この調査が授業内容の分析ではないことを伝え、特に個人の不得手な部分の話しにくさに配慮した。インタビュー内容は調査対象者の了解を得てボイスレコーダーに録音した。

インタビューにおいては、音楽科授業におけるピアノ演奏について語っていただきながら、その内容について以下の視点でより詳しく話をきいた。

○音楽科授業におけるピアノ演奏の実態

- ・ ピアノを使用する具体的な授業場面と方法、その理由
- ・ ピアノ演奏の悩みや工夫

- ・ 必要性を感じる具体的な演奏技能
- 大学生時代の音楽授業（ピアノ指導）
 - ・ 現場に出てよく活用される（役に立っている）内容、そうでない内容
 - ・ 学生のうちに身につけておきたい演奏技能

(3) 調査の分析方法

インタビューの中には、様々な視点からの回答が含まれているため、複数の内容が含まれている場合には共通する内容ごとに分割しカテゴリーに分類した。さらにそれらをいくつかの下位カテゴリーに整理することとした（表 1）。

表 1 ピアノ演奏の具体的な場面と内容

①旋律奏	
・ 旋律の音とり	・ 比較聴取時の例示
・ 前奏の役割	・ 模範演奏（範奏）
・ 奏法（運指、指のフォーム）の確認	
②伴奏	
・ 弾き歌い	・ テンポの調整
・ 曲想を感じやすくさせるため	
・ 歌唱の支え	
③合図、雰囲気づくり	
・ 時計の役目	・ 行動の指示
・ 授業開始のあいさつ	

Ⅲ. 結果と考察

1. 音楽科授業におけるピアノ演奏の実態

4名の教師すべてが授業でピアノを演奏する、と回答した。学習指導要領による4つの活動分野（歌唱、器楽、音楽づくり、鑑賞）の中から、主に歌唱活動、器楽活動の場面が挙げられた。その他としては「合図のため」や「授業開始時のあいさつ」の際に弾いていることがわかった。

(1) ピアノ演奏の具体的な場面と内容

①「旋律奏」をする

4名すべての教師が「旋律奏」をすると回答した。旋律奏の例としては、歌唱活動の場面において「右手だけだけど旋律の音取り（音高の確認⁷⁾）でピアノを使います（教師D）」や「例えば、みんなの知っているハ長調の曲はこんなのあるね。では、この曲はどんな感じがする？（イ短調の曲を演奏）・・・（教師A）」というような比較聴取のため、という例が挙げられた。また、器楽活動においては、「（鍵盤ハーモニカの指導時に）ある程度基本の鍵盤位置と指使いがわかってきたら、先生が弾くからその後に続いて弾いてね・・・（教師C）」のように前奏の役割として旋律奏をしたり、部分練習をする時の模範演奏としてそれを弾くなどの例も挙げられた。「低学年の子どもたちは、見ながらだとわかりやすいと思うんです。いくつ目（の鍵盤）だとわからない子も多くて・・・（教師C）」というように、実際に教師も鍵盤ハーモニカを持って指づかいを確認したり、適切な指のフォームを示しながら旋律奏を範奏として演奏することがわかった。

②「伴奏」をする

旋律奏や範奏に加えて、「伴奏」としてピアノを弾くのは4名のうち2名の教師 A と教師 B (ともに音楽専科) であった。教師 C と教師 D (ともに学級担任) は「伴奏」としてのピアノは弾かないとのことである。

両教師による範唱は主に弾き歌いで行われており、子どもたちの一斉歌唱や合奏時のテンポを調整する役目として伴奏をする。さらに、「(歌唱時に) 前奏で曲の感じをつかんで、前奏から相手に伝わるような表情をしていこう (教師 B)」のように、教師 B は歌唱時に、その曲に込める思いを顔や身体全体で表現することを大切にしたいという願いから伴奏を弾いている。つまり、子どもたちにより曲想を感じやすくさせるために伴奏を用いているといえるだろう。また、「ある程度の音取りができてきたら、子どもたちだけで歌えるように (教師 A)」と歌唱の支えとして伴奏を用いているようである。

③「合図」、「雰囲気づくり」として弾く

「合図」や「雰囲気づくり」のためにピアノを弾くという例も、教師 A と教師 B の2名から挙げられた。教師 A においては、「準備、一分ね。と言っても一分が(どのくらいの時間か) わからないから、例えばドラえもんとか弾いて、弾き終わるまでに準備しよう、みたいにやると子どもも楽しくできるし、終わりもちびまる子ちゃんの曲とか毎回変えて(弾いて)・・・」というように、準備や片づけの合図とともに時計の役割をもたせている。教師 A は、やや落ち着かない子どもたちには(音楽での合図が) 大変効果的で教師が何も言わずとも黙って行動する、と語っていた。また、静かにします、立ちます、座ります、などの子どもへの行動を指示するものも、「音楽の時間に“静かにして”とか禁句にしてるから (教師 B)」「最初は(静かになさいと) 言っていたり、手を叩いたりしていましたが、時間がもったいないな、って気づいたんです (教師 A)」と述べている。そこには、言葉による指示ではなく音楽によって楽しい気持ちで動くことを期待しているようだ。音を感じて動くことや効率よく指示を通すための工夫といえるだろう。

また、授業の初めに、心を開いて表現しよう、ハーモニーを味わおう、という意図から教師 B は始まりのあいさつでピアノを弾くとのことであった。このことは、授業の「雰囲気づくり」であり、前述した「合図」もこの「雰囲気づくり」の一環であるにとらえてよさそうである。

このように、インタビューから4名すべてから様々なピアノ演奏の実態がうかがえると同時に、ピアノ演奏に困難を感じていない教師 A と教師 B の両音楽専科、また、音楽専門外でかつピアノ演奏には困難を感じている教師 C と教師 D の両学級担任とでは、指導時の演奏に対する気持ちに大きな相違のあることが確認できた。次に、困難を感じている人と感じていない人の意識の違いがどのような点で表れていたかを整理したい。

(2) ピアノ演奏の悩み

ほんとにピアノが弾けないので・・・。ピアノが難なく弾ければ、何度も同じところを

練習できたりするのにそれがCDではできないので私が教えた子はみんな音痴になると思う。(中略) ピアノの練習をしてはみるものの、いざ授業となると、最初しかできなくて(中略)。弾いて私が止まっちゃうと子どもも止まっちゃうから。だったら弾かない方がいいなど。(中略) 保育園・幼稚園の先生が弾きまくっているの、子どもも不思議に思うみたいで・・・何で弾かないの? って聞いてくる。その時も困るんですね(教師D)。

同様なことが教師Cからも語られた。

歌の時は正直CDに頼っています。右手(旋律)が簡単なものは自分で弾くこともありますが、左手は簡易伴奏であっても弾かないです。弾いて間違っちゃいけないし、そこで止まっちゃってもいけないから。(中略) でも、弾けそうな時は弾いてやります。聴かせられるのであれば、生の音を(聴かせたい)って思うので(教師C)。

ピアノ演奏に困難を感じる両者は、教科書準拠CDによって補うことが多いようである。しかしながら、上記にもあるようにCDの使用は、「適した速度の演奏ではない」「ある部分のみを繰り返し練習できない」「意図する音色でないことがある」「(CDデッキだから)音量に限界がある」などの点から使いにくさのあることは他の2名を含め4名すべてが指摘している。

ここで注目すべきは、「ピアノが難なく弾ければ(教師D)」「ピアノを練習してはみるものの(教師D)」「弾けそうな時は弾く(教師C)」など、この両者が目の前の子どもたちに対してピアノの演奏の必要性を大いに感じていることであり、付け加えるなら、これらを語る時の両者の口調は重く、できないことの申し訳なさや恥ずかしさなどを言葉の端々に表していたように筆者は感じた。

さらに、教師Cの「聴かせられるのであれば生の音を・・・」という中には、教室に生まれる響きが、子どもの内面や表現に与える影響を考えていることがうかがわれる。また、教師Dの言葉にあるように、幼稚園や保育園での経験とのギャップが、子どもに与える歌にくさや音楽へののりにくさなどの影響を懸念していることもうかがえる。そして、両者は子どもの近くで様子を見取りながら一緒に身体表現をしたり、歌ったりすると話していた。細やかな支援に気を配ることで不安な部分を補っているのであろう。

一方、ピアノ演奏に困難を感じていない2名の教師はどうであろうか。インタビューにおいて教師Aは、「(一時間のうち)常にピアノの前かオルガン(教卓の位置に持ってきて)の前にいます」のように、ピアノ演奏が得意であるがゆえにピアノをいつどんな時に弾くのかをさほど意識していないようであった。教師Bは、「(歌の)一番は伴奏を弾いて二番は見に行きます、アカベラねってしょっちゅう言う。弾けない先生だって成立する授業は作っていける気がする」という。授業のどの場面でどのような意図でピアノを弾くのか、また弾かないのかということを意識しているのであろう。

(3) ピアノ演奏の工夫

特に「伴奏」時の工夫は音楽専科の教師Aと教師Bが挙げている。

いかに合唱の効果を上げるための伴奏をするかと考えている。必要な音を選んで。きちっと楽譜通り伴奏するのではなく、ポイントはどこかを見つけ、省ける音はどこかを考えて。簡易伴奏でも子どもの演奏を引き立てるものはある。(中略)例えば、低音(の人数)が足りないようなら、少し低音を増やして(伴奏して)やるとか、高音域がきたなかったりするときは高音できらきらっと音を入れたり(教師B)。

右手で旋律を弾いて、左手は伴奏で…楽譜通りに弾くことはほとんどないです。(中略)メロディーを弾いてあげると歌いやすいし、仕上がってきたらメロディーは弾かず。伴奏が入ると声を出しやすいって子どもが言うんです。(中略)みんなで合わせましょうって(合奏の)時、例えば子どもが「ド」しか弾かない時であっても、伴奏で明るい曲や暗い曲なんかに変化させてあげると乗っていきける。([「ドミソ」の和音伴奏で)ただドだけ弾いている時より楽しいみたいです(教師A)。

これらは、「伴奏」における即興が有意義であることを示しているといえよう。楽譜に忠実に弾きこなすのではなく、いかに子どもの表現(演奏)の効果を上げるための音を提供するか、子どもの表現に対してどのような音環境が必要かということを瞬時に判断している。その一方で、即興的な伴奏がより高度なことを求めているのではなく、「苦手なら苦手で簡単にすれば問題ないと思います(教師A)」「技術より音楽のどういうところを大切にしないかを知ってたほうがいいかな(教師B)」と両者が語るように、演奏する教師がいかにその楽曲なりを捉えているかという楽曲分析であり、指導内容に迫っていくなかでピアノ演奏をいかに効果的に扱うのかの判断が大切なようである。

一方、演奏に困難を感じている学級担任の教師Cと教師Dはどうであろうか。教師Dは、「ピアノの演奏は不安ながらも同時に思いっきり歌って(歌を助けにして)指示するとか、上手な子どもを前に出しています」と言っており、また教師Cの「ピアノが弾けたらいいけど、でも、ピアノを使って教えなくたって指導できると思うんです。」という言葉からも、演奏そのものについての工夫というわけではないが、困難を感じる技能を補う工夫をしていたり、意図的にピアノを弾く場面を選んでいたりするよう見受けられた。

2. 大学(養成期)を振り返って

養成校での音楽科教育、殊にピアノ実技の授業内容は4名の教師において様々であった(表2)。当時を振り返って思うこととして挙げられた4名すべてに共通していたことは、学生当時これら技能の

表2 大学でのピアノ実技の授業内容

○弾き歌い	
・文部省唱歌	・童謡などの易しい曲
○ピアノ伴奏	
・文部省唱歌	・教科書にある曲
○ピアノ曲	
・バイエル教則本	・クラシック作品
・よく知らない曲	

習得のための演習の価値がわかっておらず、今思えば単位修得のため（試験のため）だけにこなしていたという思いのようである。

以下は、4名すべてが現職にあるからこそ思う、苦くも甘くもある経験からの意見であろう。これらは、それぞれが現状から学生時代を見つめ直したものであり、小学校教師を目指して学んでいる学生が現場に出たときに想定される貴重な場面ではなかろうか。

ピアノが弾ける、歌が歌えて当たり前という認識の教員や子どもたちの方が多いので…（中略）行事（合唱祭、卒業式、入学式、運動会、学芸会、お別れ会など）では当然のこととして登場させられて、事実、非常に悩んでいる友達もいる。（中略）学生のうちに、教科書の曲くらい弾き歌いはできるようにしておくといい。少なくとも旋律だけは（弾きながら歌う）。弾きながら指導したりの“ながら奏法”が必要だと思います（教師A）。

「若手」教師Aは、上記のことは学生時代に想像もしなかった、と話していた。ただ歌に合わせて伴奏を弾けばいいというものではなく、歌いながらの弾き歌いや行事やその練習での指示を出しながらの伴奏の必要性も挙げている。特に専科教員にとって、弾けて当たり前という雰囲気为学校現場において、様々な場面に対応できるピアノ演奏が求められているようだ。

簡単な曲（小学校レベル）を両手で弾くことのできる力を大学時代に身につけるとともに、自分が一時間（45分）の授業をどのように組み立てて指導するかを考える力を身につけられるといいと思う。大学での限られた時間では、小学校の現場ですぐ活かせるものが（課題であつかわれたら）よかったと思います。（中略）各学年において、子どもたちにどんな力をどのようにつける必要があるのかを把握しておく、現場で活かされると思う。（今は）何を音楽で学習させるのかを自分が知らなさすぎだから（教師C）。

同じ「若手」の教師Cは、自身のピアノ演奏に困難を感じている現状に、学生時代の練習不足を後悔していた。「小学校の現場ですぐに生かせるもの」について考えてみると、まず一つに、すべての教科書に扱われている共通教材が挙げられてよさそうである。また、教師Cは、現場での実践を重ねることで自身の専門外の教科についても、ようやく教科教育の在り方に目が向いてきたということであり、学生時代のピアノ授業の意義についても改めて考えているようであった。

様々な経験を積み、子どもたちに力をつけるための方法がある。最低限、（ピアノで）旋律が取れたり簡易伴奏くらいできたらいいかなあ、弾きながら歌って範唱できるとか。でも（ピアノ演奏が）得意じゃない人たちだって方法を知っていればいいよね。一時間の設定の仕方をいろいろ知っていること。（中略）重症なのは子どもの心がわからないことだね。人の気持ちを理解することは学生のころから経験を積んでおかないとね（教師B）。

一方、「中堅」教員Bは、最低限のピアノ演奏技能としては旋律奏と簡易伴奏、弾き歌いと言っている。これは演奏に困難を感じていない音楽専科であるからこそその意見であろう。またピアノ演奏が得意ではない人に対しての意見を述べているのにも注目したい。教師Bは、これまでの経験から、授業での子ども理解や一時間の内容設定の大切さを語っており、それは、ピアノ演奏もその中の役割の一端を担っていると理解できよう。また、以下の内容にも注目したい。

大学の授業をきっかけに練習を続けていて《ビリーブ》だけは先生になるまでに弾けるようにと意気込んでいた人がいた。実際に現場に出て役立ったらいい。そう思うと、(大学でのピアノの授業は)きっかけになるよね。(中略)唱歌の弾き歌いをしていたし、バイエルを弾く課題もあった。やっぱり、いきなり伴奏もできないから、小学校の先生をするのであれば経験しておくといいかな。(バイエルの中だけでも様々な演奏法を)知識として知っておくだけでも(教師B)。

教師Bは、技能そのものが直接現場で生かされているか、ということに加え、大学でのピアノ実技指導についての意味を、楽譜通り弾ける、ある曲が弾けるというような目の技能面だけのものでなく、弾けた時の喜びを目指し努力しようとしたり未知の領域にも興味をもって取り組んだり、表現する喜びを味わおうとするような、自己の内面において価値高いものとして捉えている。これは、大学時代の経験が今につながる貴重な「きっかけ」と評していることに、筆者も共感をいだいた。

音を楽しむことを大切に授業展開を工夫でき、歌や器楽演奏に関して、(子どもの)自信を喪失させるような言動に十分に注意したい。自分もそうだった(辛い思いをした)から。練習してもできない子、本質的にリズム感のない子への支援の仕方をきちんと考えたい。(中略)楽しいだけでなく力をつけてあげないといけないし、子どもの情操を養うための音楽ってどうしたらいいか(難しい)・・・(教師D)。

「中堅」教師Dの経験した過去の辛い経験は、学力観が「知識・技能」にあったその当時の教育において珍しいものではなかったように思われる。また、そのような経験が音楽に対して苦手意識を生むことや、実際に現在、教師Dがピアノ演奏に関して困難を感じていることにつながっていることも否めないのではないかな。だからこそ教師Dは、子どもの気持ちを理解し、細やかな支援を心掛けているのであろう。

IV. 相山女学園大学教育学部でのピアノ指導

相山女学園大学教育学部子ども発達学科では、保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・中学校および高等学校(数学・音楽)の免許取得課程を有している。保育・初等教育

専修所属の学生よりも、初等中等教育専修に所属する学生の方が、小学校教員を目指す割合が大変高い。そこで、ここでは初等中等教育専修に所属する学生へのピアノ指導について述べていきたい。

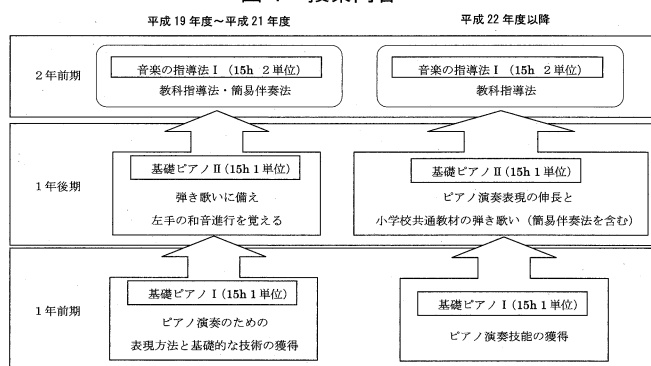
初等中等教育専修に所属する学生が受講できるピアノ実技科目は「基礎ピアノⅠ」と「基礎ピアノⅡ」である。どちらも半期ずつの選択科目なので、学生は最長で一年間の履修が可能である。初等中等教育専修の受講者数は、これまで4年間8期の平均で79名（在籍者数の70%）である。選択科目ではあるが、積極的に履修を受け入れている。

授業形態は個人レッスンであるが、他の受講者のレッスン見学や発表会を通して、他者の演奏から学ぶとともに、多くの音楽や歌を聴くことのできる授業を目指している⁸⁾。

図1 授業内容¹⁰⁾

授業内容は、学習指導要領と教員採用試験の内容を参考に決定し、完成年度に合わせて平成22年度に内容の割り振りを変更した（図1⁹⁾）。

平成21年度までは、「音楽の指導法Ⅰ」の



授業で簡易伴奏による共通教材の弾き歌いを行ってきた。平成20年度中にはML教室（電子ピアノシステム教室）が完成し、20～21年度は、クラス授業と個人レッスンを併用した手厚い指導をすることができた。しかし、平成22年度からは、小学校共通教材の弾き歌いと簡易伴奏法を「基礎ピアノⅡ」で扱うよう変更することになった¹¹⁾。初等中等教育専修を対象とする「音楽の指導法Ⅰ」で、教科指導法（小学校の学習指導案の作成や授業演習等）の充実を優先させるためである。ピアノ指導の面からは、授業時数を減らすことになった。

それゆえ今後は、弾き歌いとピアノ曲の練習を両立させるべく、学生には「基礎ピアノ」の授業に対する個々人の練習量を増やしてもらいたいところである。しかしながら、前章にあるように、現職の教員であっても、自身の学生時代に高い意欲を持って演奏技能の習得に取り組んでいたとは、なかなか言えないようである。

そこで次章では、実際に小学校教員として教壇に立った時に、不自由を感じずに済むようなピアノ演奏力とは何なのか、現職の悩みや経験から得られた示唆を踏まえて整理してみたい。それにより、大学でのキャリア教育の側面から「基礎ピアノ」授業内容の見直しを試みるとともに、授業のねらいを学生に理解させる際の一助としたい。

V. まとめ

3章での検討をとおして、小学校の現職教員から、授業時のピアノの使用方法与養成課程でのピアノ学習について、下記のような示唆を得ることができた。

- ① ピアノが得意な教師も苦手な教師も、授業内でピアノを弾く必要性を感じており、実際にも弾いている。
- ② 共通教材の旋律や伴奏はピアノで弾けるとよい。
- ③ 子どもの演奏効果を上げるための即興的な伴奏の工夫ができるとよい。
- ④ ピアノが苦手な人は、授業設定の仕方や工夫を数多く知っているとよい。
- ⑤ ピアノを弾く場合には、指導内容の理解促進のために効果的かどうかを考えることが大切である。
- ⑥ 教師自身に、音楽を楽しむ経験と表現の工夫に関する知識があるとよい。

これらの示唆を踏まえると、「基礎ピアノ」の授業を、単位修得や試験を目的とした練習に終わるのを避けるためにも、音楽を作り上げることの楽しさや、努力の先にある達成感を味わわせること、そして、表現の工夫に関する体験的知識を得ることを、ねらいの一つに据えることができるだろう。

また、現在のところ共通教材の扱いは、学生の任意選曲による弾き歌い演習にとどまっている。しかし、現場でピアノを弾く場合には、児童と一緒に歌いながら、指導しながらの「ながら演奏」になることを想定させて取り組むような動機づけが必要である。さらに、興味のある学生には、即興演奏の経験を取り入れることも検討していきたい。一方で、ピアノが苦手な学生が知っておきたい「授業の技」をどのように養成校で指導したらよいのかについては、教科指導法との関連が強いことは分かったものの、具体的に見出せたとは言い難い。今後の課題としたい。

VI. おわりに

本論では、現職小学校教員の授業実践に関するインタビューから、養成課程におけるピアノ教育のあり方を探ってきた。椋山女学園大学の「基礎ピアノ」は複数の教員が授業を担当している。多くの履修希望に応えたいという教員の思いと、時間割の都合などの理由から、受講者を教員数で一律に割り振っている。このように学生が教員を選べない以上、指導内容が教員によって著しく異なることは望ましくないという意見がある。また、教員自身も、自分が他クラスと比べて遜色なく指導できているかどうかを心配する向きもある。そこで、これまでも演習課題の共通化や、教員合同で発表会を行うなど、指導内容や到達目標などの情報を教員間で共有できるよう努めてきた。しかし、昨年度で完成年度が終わり、今後は、オムニバス方式や、個人指導と一斉指導の併用も可能になった。また、以前から声楽演習強化が課題となっているが、その検討もまだ十分ではない。もちろん、キャリア教育の側面のみを強化することは、

大学教育の本質でないことは言うまでもないことであるが、教員の個性や専門性を活かしつつ、全員に共通理解させたい内容や、身につけさせたい技能は的確に指導できるような授業方法を、担当者間で検討する余地があると思われる。そのためにも、受講後に学生自身が感じる学習成果や課題意識を把握するとともに、教育現場とも連携し、学生時代にどのようなピアノ演奏力をつけることが望まれているのかを、引き続き検証していきたい。

謝辞 インタビューに快くご協力くださり、貴重な授業実践についてお話しくださいました現職の先生方に心より感謝申し上げます。

■注および文献

- 1) 中島卓郎 2002「実践的指導力を高めるピアノ教育の試み—教員養成教育の場合—」信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要『教育実践研究』No.3 p.31-40
- 2) 鈴木涉 『教師のためのピアノ伴奏法入門』東洋館出版社 2009、佐土原 知子『新 やさしいピアノ伴奏法 (1) 入門編』ドレミ楽譜出版社 2001、他多数。
- 3) 小中学校教職員定数配当方針 小学校 2 専科教員の加配
- 4) 文部科学省 Hp http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/senkou/1300242.htm 公立学校教員採用選考 平成 22 年度公立学校教員採用選考試験の実施状況について
- 5) 教育職員養成審議会 (平成 11 年 12 月 10 日)「養成と採用・研修との連携の円滑化について」(第三次答申)では、教員の各ライフステージに応じて求められる資質能力について、そのライフステージを初任者の段階、中堅教員の段階、管理職の段階に分けている。
- 6) 年間の授業内容を見通しての聞き取りとするため、調査時期において教員として 1 サイクル (一年)を終えた教職経験 2 年目以降を対象とする。
- 7) 語りの引用の一部について、意味の分かりにくい部分については前後の文脈から () で補足し、助詞の補足も行っている。
- 8) 谷中優、小杉裕子ら (2009)「ピアノを含む教科指導法の研究と専門性の探求—芸術系教員のネットワーク作りによる—」、金沢星稜大学共同研究プロジェクト H20 年度報告書、p14、
- 9) 小杉裕子 (2009)「『基礎ピアノ』授業運営の現状と課題」
- 10) 椋山女学園大学の「履修の手引 (2009)」、「シラバス (授業内容一覧) 教育学部 (2011)」を元に作成した。
- 11) 保育・初等教育専修を対象とする「音楽の指導法 I」の授業では、保育士資格取得科目への読み替え科目であることと、2 年次の実習に備える必要性から、現在でも設置当初のまま簡易伴奏での弾き歌い演習を残している。